



地域を育み、大陸をつなぐ

2010-2011年度 国際ロータリー会長 レイ・クリンギンスミス

Tsuruoka Rotary Club

国際ロータリー第2800地区

鶴岡ロータリークラブ

平成 22 年 10 月 26 日 (火) 第 2518 回 (本年度第15回) 例会

1959 年 6 月 9 日創立 ● 例会場：東京第一ホテル鶴岡 鶴岡市錦町 2-10 ● 例会日：毎週火曜日 (12:30~13:30)

クラブホームページアドレス <http://www.tsuruokarc.org/>

E-mail: tsuruoka08@rid2800.jp

本日(11/2)のメインプログラム

新入会員スピーチ

東京海上日動火災保険(株) 庄内中央支社長 俣野 秀樹 君

次週(11/9)のメインプログラム

夜例会

そば打ち家族例会

会長挨拶

佐藤 孝子

深川先生をお迎えして職業奉仕月間特別講演を開催

皆様今晚は !!

今月は職業奉仕月間、深川純一 P D G をお迎えしての特別講演会を企画させて頂きました。今日のビジターを御紹介させて頂きます。

山形より細谷ガバナーエレクト始め 11 名の皆様、余目 R C 阿部会長始め 10 名の皆様、ようこそ御参加頂き感謝申し上げます。

鶴岡西、鶴岡東、鶴岡南の会員の皆様のご協力によりこの合同例会を開催することが出来ました。1 クラブでは到底実現出来なかったと思っています。心よりお礼申し上げます。有り難うございました。素晴らしい先生の御講演、そして懇親会どうぞゆっくりお楽しみ下さい。簡単ですが会長挨拶とさせて頂きます。

職業奉仕月間 特別講演

「現代の市場原理主義にロータリーの職業奉仕が果たせる役割」

国際ロータリー第 2680 地区パストガバナー 伊丹ロータリークラブ 深川 純一 氏



今日は、私の敬愛する藤川享胤先生のお肝煎りでお招きに与りまして、誠にありがとうございました。大変光栄に存じております。

色々肩書きのご紹介をいただきましたが、別に肩書きで喋るわけではございません。一人のロー

タリアンとしてお話を申し上げたいと存じます。

さて、最初に正岡子規と共に日本に近代俳句を唱道した高浜虚子の一句を紹介しておきます。

爛々と昼の星燃え草生え 高浜虚子

この一句の句意は、真っ昼間の大空に爛々と星が輝いて見える、そして草が群がり生えている、という将

にこの世のものとは思えない異様な情景であります。

しかし、草は目に見えますが、昼の星は見えるではありません。しかし、虚子はその星が見えるというのであります。一体、彼は何を言いたかったのでしょうか。

私の解釈は、目に見えている草は、現象の世界の情景であり、一方、目に見えない昼の星は本質の世界の情景であります。現象の世界というのは、般若心経の一節「色即是空」の「色」の世界、即ち、美人だとか、肌の色が黒いとか、背が高いとか低いとか、所謂、私達の目に映っている世界であります。

これに対して、本質の世界というのは、例えば、「月落ちて天を離れず」という言葉があるように、お月様が西の空に沈んでも、お月様は大空即ち、この宇宙を離れる訳ではありません。したがって、この言葉は、

出席報告

会員数	39 名
出席	22 名
出席率	59.46%
前々回確定出席率	84.21%

RI 会長 レイ・クリンギンスミス 地区ガバナー 塚原初男

会長/佐藤孝子 幹事/青柳孝治 会長エレクト/青柳孝治
副会長/阿部純次 会報委員会/樋渡美智子・嶺岸禮三

事務局:鶴岡市馬場町 11-63 鶴岡産業会館3階 TEL (0235) 28-3375 FAX (0235) 28-3376

この宇宙を統べてある物事の真理を述べたものであります。したがって、星というものは真昼間は目に見えなくても、厳然として大空に輝いています。これが物事の本質であります。

したがって、虚子は、この世の中には、茸という目に見える現象の世界と、真昼の星という目に見えない本質の世界があることを感じ取って、その時の感興を花鳥諷詠詩としての俳句に詠んだのであります。

そこで、私は、ロータリーの思想の世界でも「目に見える現象」に惑わされることなく、何時も「目に見えない本質」を見抜くことを忘れてはならないと思うのであります。

明治の薄幸の詩人金子みすずの詩に「星とたんぽぽ」というのがあります。

「青いお空の底ふかく、海の小石のそのように、夜が来るまで沈んでる、昼の お星は目に見えぬ。見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ」この「見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ」という言葉には全ての存在を見通しているみすずの愛の心と、隠れているものの大切さを伝える強いものがあります。したがって、私はこの詩に、ロータリー奉仕哲学と共通の境地にあるものを感じるのであります。

このように致しまして、今日の私の話に一貫して流れるものは、現象と本質についての考え方であります。

現象に惑わされず、常に本質を見抜くことを忘れてはならないということであります。

さて、枕を振るのが少し長くなりましたが、今日は、現代の市場原理主義にロータリーの職業奉仕が果たせる役割というテーマを頂いております。

そこでまず、市場原理主義というものが現代の資本主義経済社会において何故問題になったのか、というその背景から話に入って行きたいと思うのであります。

まず、証券取引所に株式を上場している上場会社では、株式の譲渡は制限されていませんから（会127）、その株式は、市場で自由に売買されます。そのため、何者かが或る会社の議決権のある株式の過半数を取得すれば、その会社の経営者は経営権を失うことになります。そこで、現経営陣の同意或いは協力なしに上場会社を支配しようとすることは、一般に「敵対的買収」と呼ばれています。

そこで、2005年・平成17年3月、ニッポン放送の株式をめぐるライブドア対フジテレビジョンの攻防によって経済社会に激しい動揺の軌跡が走ったことは、未だ記憶に新しいところであります。

これは、ニッポン放送とフジテレビジョンの現経営陣からは、「敵対的企業買収」と目されました。また、経済界、政界等からは、「敵対的企業買収の脅威」と受け止められたわけでありました。

実は、この経済界の動揺の発端は、2005年2月8日、ネット上でポータルサイトを運営するライブドアが早朝の時間外取引でわずか30分という短時間の

間にニッポン放送株の972万株（35%）を取得するという「違法と合法すれすれのグレーゾーン」の手段を使ったことによります。

この買収資金の手当は、外資系のリーマン・ブラザーズ証券から588億円を借り入れて、その後、800億円の「転換価格修正条項付き転換社債型新株予約権付き社債」（MSCB）を発行してこれを返済するというもので、社債を引き受けたリーマン・ブラザーズは、常に前週の株価の1割引の価格でライブドアの社債を株式に転換できるという、ライブドアにとって絶対的に不利な条件を呑んでの資金調達でありました。

何故このような無理をしたのかは判りませんが、ネットの世界は、1位があつて2位がないと言われている激烈な競争社会でありますから、ライブドアとしては、ヤフーや楽天を追い越すためにニッポン放送を買収して勝負をかけたのではないかとも思われるのであります。

元来、ライブドアは、平成16年9月期の売上高は連結で308億円（内営業利益56億円）にすぎません。この企業が3倍以上もあるニッポン放送を買収しようとし、800億円という自社の営業利益の14倍もの資金を調達したというのは、従来の常識を遙かに越えたものであります。

そこで、これに対抗するためにニッポン放送は、ライブドアがニッポン放送株の40%以上を取得し、フジテレビも33%を超えたというニュースが流れたその日、フジテレビ社を割当先として、発行済み株式総数の1.44倍にも当たる4720万株の新株予約権を発行すると発表したのであります。

この結果、フジテレビジョンが予約権を全て行使して株式に転換すると、ニッポン放送の株式数は8000万株となり、フジテレビは全体の約7割の株式を押さえことが出来るのであり、その時、ライブドアの保有する比率は15%前後まで低下するのであります。

この点については、商法は、「不公正なる方法によって株式を発行することで既存の株主が不利益を受けることがあれば、これを差し止める権利を認めていますから、ライブドア側は、東京地裁に対して発行差し止めの仮処分を申請し、フジテレビ側の新株発行が不公正かどうかの判断を司法に委ねたのであります。

ところで、ニッポン放送株を巡る争いは、これだけではないのでありまして、

2004年、M&Aコンサルティング（通称・村上ファンド）を運営する村上世彰は、ニッポン放送株の19%近くを買い占めました。そこで、この防衛のために、フジサンケイグループの中核であるフジテレビがニッポン放送を子会社化しようとして、2005年1月からTOB（株式公開買付）をかけていた矢先に堀江の前買い占めが行われたのであります。

村上ファンドの資金は600億円、出資している20数社のうち、大口の出資者はオリックスであります。この豊富な資金で2000年に東証2部の「昭栄」に

敵対的TOBを仕掛け、更に東証1部の「東京スタイル」の株を買い占め、株主総会での委任状闘争には敗れましたが、経営にもの申す投資家として、一頃は証券市場に新風を吹き込む時代の寵児でありました。

村上世彰がニッポン放送株を買った狙いは何か。それはニッポン放送の持つフジテレビ株34,1%でありました。村上世彰には、メディアを支配し経営する意図は毛頭なくて、ニッポン放送とフジテレビジョンの持株会社を作り、ニッポン放送が持つ莫大な資産（フジテレビ株）によって株主価値を上げることであります。つまり、村上ファンドの出資者に利益を還元することが村上の至上目的なのでありまして、同時に、村上も巨額の利益を得ることになるわけであります。したがって、村上世彰は典型的な市場原理主義者であります。

この点は、同じく市場原理主義を信奉する堀江貴文社長と似ているのでありますが、その目的とするところは、両者は全く異なるのであります。

堀江は、「人の心はお金で買える。お金を持っている人間が一番強いのであれば金持ちになればいい。人間を動かすのはお金です」という典型的な拝金主義者であります。そして、或る雑誌では、自分の目標は30歳代前半で世界一になって、フロンティアを開拓することだと言い切っています（「ビジネススタンダード」誌2002年5月号）。

一方、世界一を標榜する点ではソフトバンクの孫正義も、かつて世界一に拘りましたが、彼はその実現に「社会のため」「日本のため」という公共目的を大義名分にしました。しかし、堀江貴文は、あくまでも自分のためであること以外は語っていないのであります。

しかも、孫は「世界一」を百年の計をもって語りましたが、堀江には数年先のことしか視野に無いようであります。例えば、「経営者として40歳を過ぎたら、絶対一流ではいられないし、会社を大きくすることを考えるのは30歳代が限界だ」と言い「世の中移り変わるのだから、続くものを求めること自体ナンセンス。百年続く会社を作るよりも、新陳代謝によって新しい会社が出てきた方が健全であり、その瞬間々にナンバーワンであればよいと思う」。とも言っているのであります。（2005年1月「文藝春秋」誌のインタビュー）。この考え方は非常に利己的であります。

そして、企業は買うが事業には投資しないのであります。ここには、世のため人のためという考え方は微塵も見受けられません。このような自己中心的考え方の人間に職業倫理を説くこと自体ナンセンスであります。

ところで、ライブドアもフジテレビジョンも二言目には「株主の利益」を口にしています。しかし、ライブドアのMSCBも、フジテレビジョンの新株予約権も、市場に大量の新株を注入することによって、株価を押し下げる原因となる手法であります。その場合、最も損害を受けるのは、既存の株主であることを忘れてはならないのであります。したがって、これは両者とも欲望むき出しの争いでありまして、勿論、株主代表訴訟

の原因にもなるのであります。

その後、堀江貴文と村上世彰は、ともに証券取引法違反で逮捕されましたが、この両者に共通するところは、彼らの経営手法には、一片の企業倫理、職業倫理もないことであります。そもそも逮捕されるということは、取りも直さず彼らの倫理が最低以下であることを物語るものであります。

殊に、堀江貴文などは、先程申し上げたように、「お金で買えないものはない。プロ野球の球団だって買えるし、女心だって金で買える」と嘯く始末であります。これは全くの「自己中心的拝金主義」であります。

さて、このような経営手法が横行する現在の経済社会で、企業関係者が漫然と傍観していてよいのだろうか、企業経営に参画する者として、企業倫理的に何か手を打たなければならないのではないか、という問題意識が出て来たわけでありまして。

そこで、早速或る企業は、所謂「敵対的企業買収」に対する防衛策を検討し、早々に「自己株式の買い入れ」や「株式の持ち合い」を実施した企業もあります。

しかし、このような防衛策には問題があると思います。即ち、「自己株式」の大量取得には資本の空洞化や株価操縦の危険があり、「株式の持ち合い」には、「資金効率の低下」と「もたれ合い経営」の危険があるからであります。

したがって、アメリカでも、最近では、短期的な株価押し上げを重視する「株主至上主義」に対しては、短期利益偏重だという欠陥が指摘され、却って長期的な利潤追求を重視する日本的な企業経営を評価する傾向もあるのであります。この点も見落としてはなりません。

ところで、市場原理主義者の根底にある考え方は一体何か、ということを検討しますと、先ず、現在の拡大していく市場資本の原理として、会社は、株主のものである、ということを前提として、実はこの考え方が問題なのでありますが、経営幹部は、所有者たる株主に雇われた株主資産の運用管理人である、と主張します。

しかし、株主と経営幹部は雇傭関係でなく委任関係であります。経営幹部即ち、役員は、雇傭契約による上命下達の単なる従業員ではありません。

法律論の観点から見ると、従業員と会社との契約は、従業員が会社に対して一定の時間で区切られた労働を売って賃金を受取るという内容であります。これに対して、役員は、時間で労働を売るものではありません。

逆に言えば24時間勤務であります。四六時中企業経営のことを考えていなければなりません。つまり、時間で測られた労働の量の問題ではなく、労働の質が問題なのであり、別の言い方をすれば、役員は、Ideaを売るのであります。したがって、経営幹部が株主に雇われたなどと考えるのは法的無知も甚だしいといわなければなりません。

また、経営者は法律の許す限り最小のコストで最大の利益を上げ、株主資産の増大を計らなければならない、と主張します。

しかし、これは利潤追求一辺倒、効率の論理であって、最も危険な論理であります。企業の社会的責任とか、経済に倫理を入れることを忘れてはならないのであります。

例えば、昔、ソビエト連邦がアメリカに魁けてスポーツニクを打ち上げた時、アメリカは慌てました。そして、大学へ入ると100万ドル儲かるよなどと言って技術教育一辺倒になり、その結果、科学技術は進歩しましたが、倫理の衰退が始まり、職業倫理、社会倫理の頹廃によって挙げ句の果ては、昨今のリーマン・ショックによる世界的不況に陥って行ったことは周知のことです。

古来、物質的な繁栄は、得てして精神の衰退を招くものであります。したがって、徒なる経済の繁栄にも心しなければならないのであります。

また、会社の資産は、株主のものであるから、その意図が如何に立派であろうとも、株主の同意なくして利潤獲得以外の目的に使うことは許されないと主張します。

しかし、会社の資産は株主だけのものではありません。

また、企業の社会的責任とは、社会の一員たる市民個人々々に対して求められるものであって、会社それ自体は、ただ利潤獲得の機関に過ぎない。したがって、「経営」とは、ただ株主に対する責任を果たすことである、と主張します。

しかし、企業は社会の一構成員として社会に対する重大な責任があります。この企業の社会的責任という倫理性を否定することは出来ません。

また、株主に対する責任を全うすれば、雇い主たる株主は、経営者に対して、その業績に応じて高額の報酬を与える義務がある、と主張します。

しかし、株主が支払うのではなく、法人たる会社が支払うのであります。これは公私混同も甚だしい考え方だといわなければなりません。

また、公開企業においては、株主が経営者を選ぶのであって、経営者が株主を選ぶことなど許されていない。しかも、違法行為によって処罰されるのは、当の経営幹部であって、株主に法的責任はない、と主張します。

しかし、株主にそのような選択眼を期待するのは不可能であります。一般の株主は出資に対する配当を受けることしか考えていないのが現状であります。

要するに、以上のような市場原理主義者の主張には一片の企業倫理・職業倫理も見受けられません。そこで、これに対して如何なる原理をもって対応できるか、という問題が提起されました。

そこでまず、企業経営の根幹は、ただ利潤追求のみにあるのではなく、倫理的な企業経営であるべきであります。

そして、元来、企業は、所有と経営が一体になって

いる体制に適応するものであります。

更に、仮に会社が株主のものであって、株主が経営者を選ぶのであれば株主の投資倫理が問題として問われなければなりません。

以上が主たる問題点であろうかと思うのであります。

そこでまず、この問題については、前提問題として企業というものは本来如何にあるべきか、という企業の本質論を確認しておきたいと思ひます。

ここから今日の私の話の中核であります。

一般論として言えば、科学技術の発達により、社会は目まぐるしく変化します。したがって、職業社会も同じく時代の変遷に従って変化します。曾て存在した職業、例えば、煙管を修繕するラオ屋さんという職業がなくなり、一方、IT関連の新しい職業が生まれて来ています。このような職業社会の変化と共に経済社会の状況も日々に変化します。しかし、これらの変化は全て「目に見える世界」即ち、「現象の世界」であります。般若心経に所謂「色即是空」の「色」の世界であります。

私達ロータリアンは、この目に見える現象に惑わされず、常に本質を見抜く目を持たなければなりません。足利6代将軍に仕えた文武両道の武士蜷川新左衛門の一首、「骨隠す皮には誰も迷いけむ美人というも皮のわざなり」というように美人という目に見えている現象に惑わされてはならないのであります。

この歌に唱和して一休禪師曰く「皮にこそ男おんなのへだてあれ骨には変わるあとかたもなし」と。

要するに常に物事の本質を見据えていることが肝要であるというのであります。それと同時に、ロータリアンは、企業経営について何時も「思いやりの心」を忘れてはならないのであります。

曾てレイモンド・チャンドラーが言ったように、「人間は遅くしなければ生きていけない。と同時に、優しくなければ生きる資格がない」と。

以上を要するに、私達は何時、濡れた心で、且つ、本質を見抜く乾いた目を持たなければならないと思うのであります。

このことについて、私達が肝に銘じて忘れてはならない言葉があります。それは、皆さんよくご存じの「初心忘るべからず」であります。

これは、世阿弥の「花鏡」にある言葉であります。「花鏡」には「当流に万能一徳の一句あり、初心不可忘」と出ています。これは、能楽習練の心構えを述べたものでありますが、最初の決意を忘れるな、ということばかりではなく、凡そ藝道は生涯に亘る修業であり、一段進めばまた一段、その段階ごとに原点に立ち返って、心緩めず精進怠ることなかれ、という戒めなのであります。

この戒めは、学問に志す者にも事業に携わる者にも、或いは私的な夫婦関係にも通ずる教えでありますので、一般に広く行われて、事あるごとに屢々引用される言葉であります。したがって、この理屈は、大企業であれ中小企業であれ、いささかも異なるところはありま

せん。如何なる職業人も、この言葉を瞬時も忘れてはならないのであり、これは将来に終生守るべき鉄則なのであります。

ただ、現代の科学技術の進歩は誠に著しいものがあります。したがって、世の中の諸々の現象は、日々に新たに、日にまた新たに变化して行き瞬時も止まることはありません。したがって、時代の変化には直ちに即応しなければなりません。

しかし、世の中には時代の変化に即応して変えてゆくべきものと、如何なる時代にあっても変えてはならないものがあります。したがって、時代に即応したものは先んじて取り入れなければなりません、その変化の速度が速ければ早いほど、一層心して、変えてはならないものは一体何かということをや日々自問自答してみる必要があるのであります。

即ち、ロータリーの世界でも、先程申し上げましたように、職業分類も、新しくIT関係の職業が出てくるように目に見える現象の世界は、日々に新たに変わって行きます。したがって、これには直ちに即応しなければ時代に遅れてしまいます。

しかし、一方、本来、職業というものは如何にあるべきかという本質的なものはロータリーの核にあるものでありますから、如何なる時代にあっても変わってはならないのであります。つまり、目に見える職業の変化という現象に惑わされず常に本質を見抜くことが大切なのであります。このことを忘れて目先の利害得失にばかり心を奪われますと、あっという間に転落することは幾多の先例で明らかであります。したがって、『初心忘るべからず』は、やはり永遠の真理なのであります。殊に私達ロータリアンは、この言葉を毎朝反芻する必要があります。

そして、私達は、職業社会の状況がどのように変化しようとも、常に、職業というものは本来如何にあるべきか、企業というものは如何にあるべきか、職業社会は如何にあるべきか、という本質を観る目を失ってはならないと思うのであります。これは、まさに理念の問題であり、「見に見えない世界」「本質の世界」の問題であります。

しかし、実は、物事の本質を見抜くという、このことが中々難しいのであります。例えば、民主政治というものは、多数決で全体意思を決めていきます。しかし、多数が常に正しいとは限らないのであります。少数派が正しいこともあります。したがって、多数決というのはあくまでも全体意思を形成するための単なる手段に過ぎませんから、多数派が正しくないことも当然あります。したがって、民主政治は、常に衆愚政治になる可能性を孕んでいるのであります。いわば民主政治による統治の結果は、一つの現象に過ぎず、それが企業の本質に合致しているかどうかとは全く別個の問題であります。

ロータリーの世界で言えば、例えば、一業一会員制の原則が2001年の規定審議会の多数決によって廃止されたのも現象の問題であります。これは、規定審議会というRIレベルにおける多数決原理によって否

決された現象の問題でありまして、このRIレベルで廃止された一業一会員制の原則をクラブレベルにおいて採用するか否かは、各クラブが自治権に基づいて決すべき問題なのであります。これは現象論ではなく、本質論であります。したがって、私達は、この現象論と本質論とをはっきりと見極めなければならないのであります。

そこで、ロータリーとはそもそも如何なるものかということを考えて見ますと、ロータリーは一つの運動体であります。しかも、その運動体の目指すところは「倫理運動」であります。ロータリーは、政治改革を目指す政治運動でもなく、多数の力をたのむ社会運動でもありません。したがって、ロータリーは、「権力」によってその目的を達成しようとするものではないのであります。

また、例えば、公害を予防するための社会運動を起こすなどということは、とんでもないことでありまして、ロータリーは、そのような勇ましいことを行うことを社会的に期待されている団体ではないのであります。

ロータリアンは団結出来ないのであります。曾てポール・ハリスが謂ったように、ロータリアンは団結しないところに美德があるのであります。したがって、良質な発想を提唱することは出来ても、団体行動をとることは出来ないのであります。

「ロータリアンは団結せず」ロータリークラブは社交クラブなのであります。会員一人一人が自分の主体性を大事にしながら、自分の内なる発想を良質化し、そのことによって社会を抜本的に改革していく、このような運動がロータリー運動なのであります。

また、政治課題は、団結しなければ達成出来ません。徒党を組まなければ達成できないのであります。ロータリーは、政治課題に取り組むには最も不適切な団体だと言わなければならないのであります。ここでも、ロータリーの個人奉仕の自在性が意味をもつのであります。

そして更に、企業とはそもそも如何なるものかということを考えて見ますと、企業は、一つの「組織体」であります。しかも、その組織体の目指すものは、第一に、利潤の追求、即ち、金儲けであります。それと共に企業も社会の一構成員でありますから、社会の倫理を無視することは出来ません。即ち、社会に迷惑をかけるような金儲けをしてはなりません。したがって、倫理的に金儲けをしなければならないのであります。ここから企業の社会的責任という問題も出てくるのであります。

そこで、この倫理的な金儲けということについて一つの例を申し上げます。

例えば、資本主義経済社会は、元来、分業を通じて発展して来たものであります。イギリスのグラスゴー大学教授アダム・スミスの著書、経済学のバイブルといわれる『国富論』の冒頭に出て来るのが実は分業(Division of labor)なのであります。

現在、資本主義社会は、分業によって効率を高めて行くところから、簡単な商品を生産する場合でも、下請との関係を持たない会社は殆どありません。部品製造などは専門家に任せた方が良質なものを安く作ることが出来るので、人間は、分業に分業を重ねて来たのであります。

ところが、分業の当事者、即ち、親会社と下請との間は、力のバランスが崩れていて、資本力は、原則として親会社の方が強いのであります。そこで、ローマの格言に『人は人にとって狼である』と謂われるように、力の強い者が弱い者を犠牲にして行くことになるのであります。ここにマルクス・レーニン主義の出て来る一つの原因があります。

例えば、物を作って売って1円の金を得たとします。1円というものは交換価値でありますから、1円と等価値の物と交換することが出来ます。

そこで、これを1万倍して1万円の金を持っているとすると、1円の物を1万倍した物しか買えないかと言うと、実はそうはならないのであります。

交換価値を交換力・購買力と考えますと、1円の1万倍は、数値の上ではまさに1万円になりますが、現実には物と交換する場合には、1万円以上の物と交換することができるのであります。したがって、1万円持って居る人と1円しか持っていない人とは、交換力・購買力に大差が出てくるわけでありまして、したがって、大資本は益々大きくなるのであります。

この点が、マルクスの謂う『資本の論理は力の論理』でありまして、マルクス主義は、このアンバランスを国家権力によって調整しようとする発想なのであります。

これに対して、ロータリーはどのように考えるのか。ロータリーは倫理運動の立場からこのアンバランスを「徳の力」によって調整しようとするのであります。徳というものは、目に見えないものでありますが、何億円にも替え難いほど価値のあるものであります。この「徳の力」を一枚入れる、というのがロータリーの謂う職業奉仕の基本的な考え方なのであります。謂わば、経済に倫理を入れるという考え方なのであります。これが企業というものの本質をついた議論であろうかと思ひます。

このように、ロータリーは倫理運動であり、本来政治団体ではありませんから権力を行使するものではありません。あくまでも「徳の力」によって「意識改革」を行うものであります。したがって、ロータリーというものは、それが倫理運動である限り、その限りでしか機能できないと思うのであります。したがって、本日のテーマについても、ロータリーは、原則として倫理運動としての役割しか果たし得ない、と答えざるを得ないのであります。

では、ロータリーが倫理運動としての役割を果たすために、心得るべきことは一体何か。それは、目に見えている現象に惑わされずに物事の本質を見抜くことであります。

ロータリーは倫理運動である以上、職業倫理、企業倫理を高めることは、ロータリーの至上命題であります。したがって、企業が倫理的であるべしとする限り、ロータリーもその限りでしか機能できないと思うのであります。企業というものが、単なる利潤追求のみならず、倫理的な企業経営をも目指さなければならないものである以上、職業倫理、企業倫理を高めることは、企業経営者の至上命題でもあります。

ところが、市場資本の原理を突き詰めて行きますと、やがて「資本の論理は力の論理」となって弱肉強食の世界となり、企業の倫理、職業の倫理というものがなくなってしまうと思われるのであります。これでは円熟した資本主義社会は生まれぬし、福祉社会もまた生まれぬと思うのであります。

したがって、市場原理主義の考え方は、現象に惑わされて、企業は本来如何にあるべきかという本質を見失ったものと思うのであります。これは、資本主義経済社会にとって、決して正しい考え方ではありません。私は、現在、大勢を占めている公開資本主義市場は、あくまでも一つの「現象」にすぎないものであって、経済社会・職業社会の「本質」に根ざしたものではないと思うのであります。

そこで、今からは予定していた話の構想を変えまして、現象と本質というものについての私の基本的な考え方を申し述べたいと思ひます。

さて、人間が作り出した国家を始め諸々の社会制度というものは、全て社会の要請に従って生れ、社会の要請に従って発展し、社会の要請が無くなれば脆くも潰え去っていきます。これは全て目に見える現象の世界であります。

例えば、紀元前3世紀から紀元後3世紀まで隆々として栄えた古代ローマ帝国、これも社会の要請によって生れ、社会の要請に従って発展し、社会の要請がなくなると、紀元後3世紀に脆くも潰え去ったのであります。

ところが、古代ローマ帝国は、紀元後3世紀に滅亡する直前に「ローマ法典」という素晴らしい法律を作り上げていたのであります。そこに説かれていた思想とか原理は非常に優秀であったが故に、それ以後、約1700年の歳月を閲して今日の我が国の民法第206条に復活しているのであります。それは所有権の原理であります。

これは一体何を意味するのか、と謂いますと、ローマ帝国というのは、目に見える現象の問題でありましたから、跡形もなく滅亡してしまいました。これは、現象の問題であります。しかし、所有権の原理というローマ法に内在していた優秀な原理というものは、それが優秀であったが故に時代を超越したのであります。そして現代に復活しているのであります。これは現象論ではなく、本質論であります。恰も、キリスト教のバイブルが2000年の歳月を閲して、未だに私達の心の糧になっているのであり、道元禅師の正法眼蔵の提唱が650年の歳月を超えて今日に伝えられています。

このように、人類文化史における優秀な思想とか原理というものは、それが目に見えないが故に時代を超越することが出来るのであります。

一つの譬え話をします。二人の坊さんが刀をもって喧嘩をしました。一人の坊さんが他の坊さんの首を刀で刎ねました。その首が中空に飛び上がって、そこに止まり、やがてその首が二千年後の或る坊さんの首にスポッと納まったと謂う、この問題を如何に説くか。

先ず、中空に飛び上がった首を思想とを考えてください。そして、倒れた胴体を制度・組織と考えてください。制度・組織は目に見える現象の問題であります。したがって、首を切られて命がなくなればそこで倒れて消滅してしまいます。これは目に見える現象の世界であります。

しかし、思想というものは目に見えないが故に時代を超越するのであります。これは目に見えない本質的なものであるが故に時代を超越して、やがてその思想・原理を受け入れる人が現れたときにその首にスポッと収まって、そこからまた世の中に蔓延していくという物語なのであります。

そのようなことを立証する事実があるのか、と言いますと、このような現象と本質に関する物語は、ロータリーの世界にも存在します。

実は、日本ロータリーが軍閥の弾圧によって壊滅したという日本ロータリー史上誠にエポックメイキングな出来事であります。

昭和初期から始まった軍閥の台頭、そしてロータリーに対する軍閥の弾圧によってロータリーが右往左往しながら、挙げ句の果てが壊滅状態に追い込まれて遂に解散をしてしまったのであります。時に、昭和15年のことであります。

このような種類の国家社会の動きというものは、一つの潮流として起こって来ますと、最初は処女の如く、遂には脱兎の如く、日本のロータリーを押し潰すに至ったのであります。

これは、力と原理との関係で言えば、国家は力でありロータリーは原理であります。そして、長期的に見ると、原理が勝つのであります。但し、それには条件があります。第1に原理が優秀であること。第2にその原理を自信をもって他人に伝えられることであります。

ところで、ロータリーが壊滅するについては、もともとロータリーの側に多少の原因があったのか、と言いますと、それは、無きにしも非ずでありました。

第1に、戦前のロータリーは超一流の実業家によって独占されていました。

即ち、大衆との接点がなかったのであります。したがって、庶民の中に足を据えられない社会運動は、何か事が起るとバイタリティがないのであります。

第2に、当時は、日本の政治権力が軍閥に握られていて、軍閥はアメリカの国際政策と対立する構えを見せ、何れはアメリカと戦争をしなければならない準備作業を組んでいた時代でありました。

このような、日米感情が悪化するムードの中で、本

部がアメリカにあって、名前がインターナショナル。即ち、1850年のパリ宣言、『万国の労働者よ 団結せよ』と言ったあの時に掲げられた名前がインターナショナルであります。

そこで、ロータリーは赤だとか、国際的秘密結社フリーメイスンの隠れ蓑であって、アメリカに情報を売るスパイだ、とか謂う理論が成り立つようになったのであります。勿論、ロータリーは、これに対して色々と反論したのでありますが、結局、衆寡敵せず、敗れてしまったのであります。

このように、ロータリーが敗れていく過程の中で、日本のロータリーが色々とその対応策に苦慮しながら、その苦しみの中から今日のロータリーの一般慣例を生み出していますので、これに触れておきたいと思えます。

それは、昭和8年、国歌斉唱・国旗掲揚の慣例を生み出したことであります。

即ち、ロータリーはアメリカに本部があるスパイの手先であるから、このような団体は天皇陛下の御為にならない。したがって、解散すべきだとして右翼の壮士の団が京都ロータリークラブに押しかけてきたことがあります。

時のクラブ会長石川芳次郎さんは、『ロータリーというものは、職業人の集まりであって、毎週例会において世のため人のための心を磨き、その磨かれた心をもって御国のために奉仕しようとする団体である。したがって、我々は、忠君愛国、即ち天皇陛下の御為にも奉仕活動をしているのである』

と説いたのでありますが、壮士達は、納得しません。『では天皇陛下の御為にも奉仕活動をしているのであれば、その証を立てろ』と迫ったのであります。そこで、石川会長は、

第1に、ロータリー運動というものは、国際的な運動であるから例会場に国旗を掲げる慣例はありません。しかし、我々は、天皇陛下の御為にもまた奉仕活動を行うことの証として、これからは、例会場に国旗・日の丸を掲揚しましょう。

第2に、ロータリークラブは、例会の始めにロータリーソングを唄いますが、天皇陛下の御為にもまた奉仕活動をしているということの証を立てる意味で、これからは国歌君が代を斉唱しましょう。

以上二つの条件を提示したところ、壮士達は、『よし判った』と言って退散していったのであります。

ロータリーの地獄耳と謂われていますように、ロータリーの情報の伝達は実に早かったので、このことが、瞬く間に日本全国のロータリークラブに知れ渡り、例会で国旗を掲揚し、国歌を斉唱するのは、右翼撃退に卓効があるというので、この時から、ロータリークラブは、右翼に対する対応策として、例会に国旗を掲揚し、君が代を斉唱することが一般慣例となって今日に及んでいるのであります。時に昭和8年のことであります。

しかし、このような対応にも拘わらず、事柄は元来、

感情問題でありますから、事態は段々と厳しくなり、四王天延孝陸軍中將が、内務省の主催で国際スパイの講演をした時に、『ロータリーは、国際的な秘密結社であるフリーメイソンの隠れ蓑であり、アメリカのスパイを養成するものである』

と説いて廻ったために、国論大いに上がりまして、ロータリーは次第に壊滅の道を歩むようになったのであります。

なお、四王天延孝中將の種本は何かと言いますと、フリーメイソンを敵視したカソリックの神父ボアステールの書いた【国際ロータリーとマソン結社】と【マソン結社の組織と秘密】の2冊でありました。マソンというのはメイソンのフランス語訓みであります。

さて、当時の日本国内の状況はどうであったか。

一説によれば、米山さんが憲兵隊に呼ばれたとも言われていますが、この事実はないと思います。何故なら、米山さんは、貴族院議員であったからであります。

しかし、米山さんの側近芝染太郎さんは憲兵隊に呼ばれて、拷問の場を見せられたと言われています。

また、神戸クラブの小菅金造パストガバナーは、大学同期の時の大阪控訴院長（今なら大阪高等裁判所長官）から、「早くロータリーを辞めた方がいいよ。」と忠告されたそうであります。しかし、小菅パストガバナーは辞めませんでした。

また、神戸クラブの直木太一郎さんは、昭和9年当時、クラブ幹事でありましたが、神戸高商の五百旗部教授の卓話『マルキシズムについて』を謄写版刷りで、その要約したものをクラブ週報でクラブで会員に配布したところ、それが警察の手に入り、幹事の直木さんが三宮署に呼び出されて、大目玉を食って始末書をとられたというのであります。

実は、その卓話は、マルキシズム反対の卓話でありましたが、警察の言い分は、『今のご時世に、そもそもマルキシズムなる文字を使うこと自体がけしからん』というのであります。

このように、当時の軍閥は、マルキシズムやフリーメイソンを敵視していましたが、元来ロータリーとフリーメイソンとは何の関係もなかったのであります。

ところが、当時は、事柄が感情的に捉えられていた時代でありましたから、国民は、簡単に四王天延孝中將の考え方に乗ってしまったのであります。

つまり、先程申し上げたように、ロータリーは、超一流の実業家ばかりで構成されていたばかりに大衆の理解の支えがなかったわけであります。これがロータリーの弱さでありました。そこで、国論を挙げてのロータリー壊滅運動が展開されることになったわけであります。

何はともあれ、この当時既に、ロータリークラブに対する干渉や圧迫が次第にひどくなり、例会にまで憲兵や特高警察がしばしば出席し、また、例会の卓話も予め警察に届け出なければならなくなってクラブもその精彩を失ってしまったのであります。

そして、遂にロータリークラブの解散が相次ぐようになりました。

昭和15年、1940年8月8日、静岡クラブが何らの討議をすることなく真っ先に解散しました。次いで、8月12日、大阪クラブが解散決議、8月19日に岡山クラブ、更に、8月21日、京都クラブが解散決議をしました。

東京クラブでは、8月14日、例会で解散か否かについて討議が行われ、米山さんが、内務大臣と外務大臣に会い、芝染太郎さんが憲兵隊に当たった上で対策を立てることになっていたのであります。

ところが、米山さんが軍当局に呼び出されて、ロータリーの組織機構は大日本帝国に対する反逆である、とまで極言されたのであります。そして、当時既に、静岡、大阪、京都をはじめ全国のクラブが続々と解散し、R Iを脱退しました。

そこで遂に、最後に、9月11日、東京クラブが解散することになり、東京クラブの壇上に日本ロータリーの創始者米山さんが立たれたのであります。

『重い足を引きずって私は今ここに立つ。こんなつらい気持ちで皆さんに話さねばならないのは、20年来初めてである。私はただ、かかる結末になったことをお詫びしたい。』

日本国中のロータリークラブが一致団結しているならば兎も角、このように散り散りになっては最早手の施しようがない。ここはひとまず解散をして時の来るのを待とう。

創立以来の20年を顧みると、誠に感慨無量である。この間、ロータリークラブが如何に国家社会に貢献して来たか、その歴史は燦として輝いている。

私の眼底には、絵巻物の如くそれらが彷彿としてくる。私はただ、皆様に御礼を申し上げ、自分の不行き届きをお詫びしたい』

これが日本のロータリーが軍閥の弾圧によって壊滅した最後の姿でありました。

では、それで日本のロータリーがなくなったのかと謂いますと、確かに、目に見えるロータリーという組織は壊滅しました。しかし、目に見えないロータリーの思想が良質であったがためにロータリー運動はなくならなかったのであります。

解散当時、日本国内には、ロータリアン数2142名、クラブ数48、本州に37クラブ、朝鮮・満州にそれぞれ4クラブずつ、台湾に3クラブ、合計48クラブでありました。

今日のロータリーから見ると、1地区にも満たない、誠にささやかな組織ではありましたが、皆、粒よりの素晴らしいロータリアンの集団でありました。したがって、ロータリークラブやR Iという組織が壊滅しても、ロータリー運動は依然として止めなかったのであります。

ところで、ロータリークラブは解散してしまいましたので、もうロータリークラブという名前は使うこと

が出来なくなりました。そこでどうしたか。

神戸ロータリークラブは、例会日が木曜日でありましたから神戸木曜会と名前を変えました。大阪も例会日をとって大阪金曜会、東京は東京水曜会と名前を変えて例会活動を続けたのであります。ちょっと変わったところでは、横浜同人会、名古屋同心会、福岡は、清く和すると書いて福岡清和会、札幌は、札幌職能協会、これは職業奉仕をもじったものであります。

神戸クラブは、9月5日に解散し、その1週間後の9月12日には早くも神戸木曜会と名前を変えて例会を始めました。名前を変えれば例会活動をしなくてもよいではないか、と考える人が居るかも知れませんが、しかし、何故ロータリーを解散させられたのかというその理由を考えると、これは大変危険なことでありました。

何故かと言いますと、当時の軍閥は、ロータリーをアメリカのスパイの手先だと決めつけていたのでありますから、一旦ロータリーを解散しておきながら、また同じところで同じメンバーが例会をしている。これは、一つ間違えれば思想犯として憲兵隊に引っ引かれて拷問される虞があったからであります。現に思想犯の中には拷問によって獄死した人もいたのであります。将にこれは身の危険をおかしてまで命がけで例会活動を続けていったのであります。

やがて、神戸は戦災で丸焼けとなり、例会場のオリエンタルホテルも壊滅しました。では、それで例会をやめたのか。例会は止めなかったものであります。或るビルの地下室に例会場を移しました。戦災で停電していますから、昼でも蝋燭が揺らめいているような廊下を通して、勿論、食堂はありませんから弁当持参で例会を続けたと言われていました。

このようにして、憲兵や特高の厳しい監視の中で、恰も【隠れキリシタン】のようにして命がけで例会活動を続けて行ったのであります。そして、戦後、昭和24年に国際ロータリーに復帰するまで、神戸クラブは一回も例会を休んでいなかったものであります。東京クラブ以下その他のクラブも同じ状況でありました。軍閥の弾圧を受けながらも、身の危険を冒してまでロータリーの精神伝統を守り切ったのであります。

一体何が彼等をそこまで燃え上がらせたのか。それは、例会を中心とするクラブ親睦の良質性、その親睦のエネルギーから生まれた職業奉仕を中核とするロータリー思想の崇高性、その思想にぞっこん惚れ込んでいたために例会活動をやめることが出来なかったものであります。将にこれは、目に見えるロータリークラブや国際ロータリーの壊滅という現象に惑わされずに、ひたすら目に見えないロータリー思想の実践を貫き通した感動の物語であります。

もし、今のロータリーがこのような弾圧を受けたとすれば、果たして何人のロータリアンが弾圧に耐えてロータリー運動を守り切ることができるでしょうか、答えは、明らかにネガティブであります。今のロータリアンは、日々の生活に何不自由なくとも簡単にロータリーを辞めていきます。これはロータリーの勉強をしてい

ないためにロータリー思想の魅力が判らないからであります。

このように致しまして、日本ロータリーは、戦後、国際ロータリーに復帰するのでありますが、実は、このことについても大変な苦労話があります。即ち、

戦後、ロータリー拡大の神様 Extention King と謂われた東京ロータリークラブの柏原孫左右衛門さんは、全国を歩いてこの隠れキリシタンの時代のクラブの状況を調査しました。そして、その結果をロータリー復帰の資料として国際ロータリーに提出したのであります。これが国際ロータリーを動かしたのであります。

ところで、R I は、昭和20年即ち1945年頃から、原理認識の衰退が始まるのでありますが、日本のロータリーは昭和35年即ち1960年頃まで良質な種を持続することが出来ました。これはこの【隠れキリシタン時代】のロータリアンのエネルギーが戦後も力を貯めていたお陰であります。

このことについて、戦後、あるロータリアンが、戦前のロータリーと戦後のロータリーを比較して、戦前のロータリーを金平糖のロータリー、戦後のロータリーを角砂糖のロータリーと評したことがあります。

金平糖は、形はまちまちで不揃いだが、硬くてしっかりしていて咬んでも簡単には崩れないが、角砂糖は、形は整然として美しいが、柔らかくて、紅茶に入れるとすぐ溶けてしまうと言うのであります。このように、戦前のロータリーは、まさに金平糖のような粒よりのロータリアンの集団であったと謂えるのであります。

実は、この戦前、戦中、戦後のロータリーには後日談があります。それは、今から15年前の阪神淡路大震災の時に、阪神間のロータリークラブは壊滅しました。芦屋川ロータリークラブも壊滅しました。大震災の2日後、クラブの元会長の福本真一さんから電話がありました。

『先生、クラブの例会場も事務局も会員の住居も事業所も何もかも全滅しました。しかし、例会を開いてはいけなんでしょうか。道端でも何処でもいいから、とにかく皆で集まれるだけ集まって皆で励まし合いたいのです』

と言うのであります。私は、『それこそ本当のロータリーの親睦だから是非おやりなさい』とって電話を切りました。

後で報告を聞いたところ、震災直後の例会には13名集まりました。例会場は適当なところを探したようであります。その次の例会は21名、3回目は23名集まったそうであります。

要するに、芦屋川クラブは、震災で例会場も事務局も会員の住居も事業所も、全て潰れましたが、例会は一回も休んでいなかったものであります。これは、将に金平糖のロータリーだと謂うべきであります。

また、元R I 理事の今井鎮雄先生の所属している神戸西ロータリークラブは、テリトリーが大震災で壊滅した神戸市の長田区であります。したがって、殆どの会員の住居も、事業所も壊滅しました。例会場のホテ

ルオーケラも使用不能になりました。

そこで、例会場がないので会員達は、村野工業高校という高等学校に集まりました。40名集まったそうでありす。その高校には大震災で亡くなった670名の遺体が安置され、820名の被災者が詰め掛けていたのでありますが、会員達は、その中で例会を開いたのであります。

私は、この話を聞いて、戦前、戦中、戦後の日本のロータリーの精神伝統というものが脈々と受け継がれているということを実感したのであります。

このように、ロータリアン達が戦時中の戦災や阪神大震災によって、例会場も事務局も住居も事業所も何もかも全てを失って無一物になった時に、彼らが縋ろうとしたもの、それが実はロータリーであったということは大変感動的な物語であります。余程ロータリーに魅力がなければ、このようなことは起こらなかったと思うのであります。彼らがロータリーの精神伝統、例会中心主義、親睦の良質性、職業奉仕の崇高性、このようなものにぞっこん惚れ込んでいたが故に例会活動を辞めることが出来なかったのであります。

最近のロータリーは衰退しているとか、墮落しているとか、とかくの意見がありますが、私は、戦災や大震災のような異常事態になったときにこそ、ロータリーの真価が判ると思うのであります。私は、これらの体験を聞き、大変心強くも思いましたし、嬉しくも思った次第であります。これは、ロータリーの魅力として忘れてはならない物語だと思ふのであります。

イギリスでは、「ロータリーは人間の魂の在り方の問題である」と言われています。この戦前、戦中、戦後の先輩ロータリアン達の話や、阪神大震災の話を見ると、ロータリーが人間の魂の在り方の問題である、という言葉に心底納得する事が出来ると思ふのであります。これは、まさに思想としてのロータリーの魅力であります。

以上を要するに、現象と本質についての私の考え方を申し上げましたが、今日は、市場原理主義という一つの現象に過ぎないものとロータリー運動という本質的なもの、在り方について、企業管理の視点からロータリーの役割というべきものを申し上げたわけでありす。

このような視点から見ますと、会社というものは、決して株主だけのものではないのであります。私達が信奉しています職業奉仕というものは、将に本質をついた万古不易なものであると思ふのであります。決して市場原理主義のような一時代の現象に過ぎない薄っぺらなものではないのであります。したがって、時代の変化に対して常に企業倫理、職業倫理を高めてそれを実践し、そして、物作りという基本的な考え方に腹を据えるべきであります。最近、知的戦略だとか金融派生商品だとか謂っていますが、私は、そのようなものは実業ではなくて虚業だと思ふのであります。私達は、矢張り如何なる時代の変化に対しても常に企業倫理、職業倫理を高めていってそれを実践する、そして、額

に汗して働くという基本的な考え方を忘れてはならないと思ふのであります。

そして、ロータリアンとして一番大事なことは、全ての人に対して自分をひたすら謙虚に低く侍していくという心がなければならないと思ふのであります。

得てして最近、物の豊かさに溺れて、心が奢り高ぶって精神の衰退を招くおそれがあります。このことに注意しなければなりません。

このような基本的な心構えを実践していくことによって世の中を少しでも明るくしていくことが大切であります。

今、ロータリーは大変衰退しています。20世紀初頭に築き上げました素晴らしい原理の体系、将にがちりと固められた一本の棒の如き原理の体系を戦後は次々に崩れていき、今殆どその原型を留めていません。例えば、一業一会員制もロータリー道徳律も廃止され、決議23-34号は歴史上の文書としてのみ存在するに過ぎません。このように衰退したロータリーをこのまま放っておくわけには参りません。私達には、何とかしてこのロータリーを戦前の金平糖のロータリーのように復活していく義務があります。これが今までお世話になったロータリーに対する私達の努めであると思ふのであります。

なお、最後に申し添えますが、決議23-34号は大変大事なものではありませんが、それが規定審議会の決議によって廃止されたこと自体は問題ではありません。そこに書かれた文章が大事なのではなく、決議23-34号の思想が大事なのであります。文字に書かれた紙切れが大事なのではなく、決議23-34号に籠められた心・思想が大事なのであります。例えば、一子相伝の禅宗が一人の師匠から一人の弟子へ寝食を共にしながらその心・悟りの境地を伝えて行くように、ロータリーは禅宗ほど厳しいことは謂いませんが、それでも、毎週の例会でお互いに顔と顔を合わせて話し合い、心を寄せ合ってお互いの人格を高め合うのであります。そのようにして培われたロータリーの心を地域社会の人達へ、職業社会の人達へ、世界社会の人達へそして後の世の人達へ伝えていくのであります。そのための例会なのであります。だからこそ日本ロータリーの始祖米山梅吉先生は、「ロータリーの例会は人生の道場である」と喝破されたのであります。したがって、例会出席にはこのような深い意味があるということをお心に留めておいていただきたいと思ふのであります。

御静聴ありがとうございました。

委員会報告

★出席委員会

○ゲスト

深川 純一 先生（伊丹ロータリークラブ）

○ビジター

ガバナーエレクト事務所 細谷 GE ほか 12 名

鶴岡西ロータリークラブ 23 名

余目ロータリークラブ 10 名

立川ロータリークラブ 3 名

鶴岡東ロータリークラブ 18 名

鶴岡南ロータリークラブ 15 名

○メイクアップされた方

丸山 隆志 富樫 松夫 佐藤 友行 塚原 初男

藤川 享胤 阿部 純次 青柳 孝治 加藤 恒介

木村 節 真島 吉也 嶺岸 禮三 越智 茂昭

佐藤 孝子 高橋 良士 田中 豊 加藤 亨

前田 優 樋渡美智子 本間喜美子 佐々木喆彦

富田喜美子